

# 牛の膀胱平滑筋肉腫の1例

○川口絵梨<sup>1)</sup>、中村溪太<sup>2)</sup>、岩田智明<sup>1)</sup>

1)神奈川県食肉衛生検査所、2)神奈川県小田原保健福祉事務所

## I はじめに

動物では、膀胱の間葉系腫瘍において平滑筋腫は最も一般的な腫瘍であるが、平滑筋肉腫は稀とされている。今回当所所管と畜場に搬入された牛で、膀胱に腫瘤を認め、病理組織学的に異型度の高い腫瘍細胞を認めたが、有糸分裂像が稀な平滑筋肉腫に遭遇したので概要を報告する。

## II 材料及び方法

症例は牛、ホルスタイン種、雌、190カ月齢で、起立不能のため病畜として搬入された。病変部を10%中性緩衝ホルマリン溶液で固定し、パラフィン切片を作製後、HE染色、と銀染色、PTAH染色及び各種一次抗体を用いた免疫染色を実施した。

## III 成績

肉眼的に膀胱粘膜面では、膀胱尖近傍の腹側粘膜下に径3cmの腫瘤を認めた。断面では、同腫瘤は乳白色不規則分葉状で膨隆し、粘膜下に主座していた。病理組織学的に腫瘤部では、粘膜下組織から筋層にかけて、腫瘍細胞が増殖巣を形成していた。腫瘍組織を構成する腫瘍細胞には次の2種類を認めた。①紡錘形で好酸性からやや淡明な細胞質を有し、核が楕円形から円形の細胞。②紡錘形から多角形で好酸性の広い細胞質を有し、核が円形から不整形の大型の細胞。②の腫瘍細胞では、核が分葉状を呈するもの、核内細胞質封入体を認めるもの及び多核巨細胞を多数認めた。①及び②の腫瘍細胞は種々の割合で混在し、束状に配列していた。腫瘍細胞の壊死は認めず、有糸分裂像は稀であった。腫瘍間質に硝子様物質が散見された。と銀染色では箱入り像が観察された。腫瘍細胞の細胞質はPTAH染色では青紫色を呈し、横紋は認めなかった。免疫染色では腫瘍細胞はVim、SMA及びDesに陽性、CK(AE1/AE3)、Lys及びs-100に陰性を示した。

## IV 考察

本症例は肉眼所見及び病理組織学的所見から、膀胱の平滑筋腫瘍であると考えた。

動物の平滑筋腫瘍の良悪性の鑑別点として、腫瘍細胞の多形性や核の異型性、浸潤性増殖や凝固壊死の有無、有糸分裂像の数が挙げられる。本症例は浸潤性増殖や凝固壊死を認めず、有糸分裂像は稀であったが、腫瘍細胞の異型度が高く、Vimにびまん性に陽性を示したことから平滑筋肉腫と診断した。いっぽう、人では、異型度の高い腫瘍細胞を認めた場合でも良性の経過をたどることから、平滑筋腫に分類される組織型が存在する。動物では、本症例と同様の組織所見を示す平滑筋腫瘍の報告はなく、その悪性度については今後症例を蓄積し検討する必要がある。